

# 労働者は聞かなければ生きられない

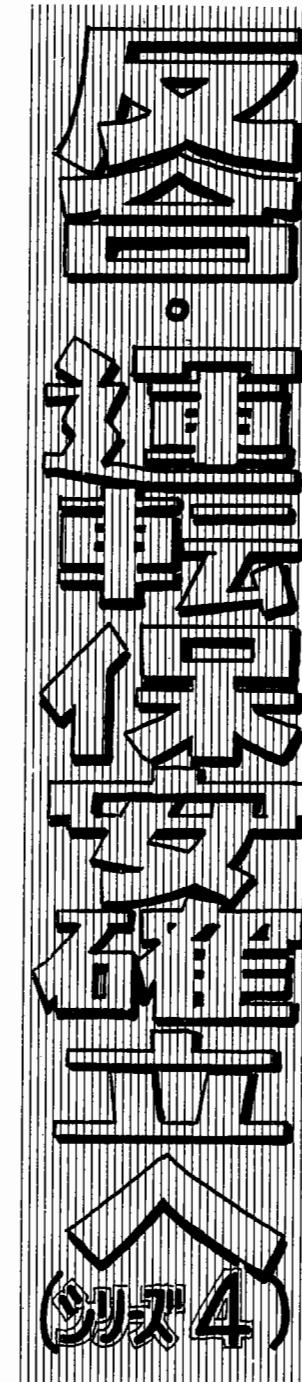
日刊  
労働者千葉

87.11.12

No. 2701

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八（動力車会館）  
(鉄電)二九三五)六・(公衆)〇四七二(22)七二〇七



われわれは、事故、運転保安の問題の本質が、自らが闘うことを通してしか、自らの生命も生活も守れない、という労働運動の原則の中にあることを、あらためて自覚しなければなりません。

前が見えなくとも走らせろ

向にやられたくないもんな

だけか

十月二八日、房総一帯に濃霧が発生しました。

「電柱一本分くらいしか見通しが利かない」中で懸命に運転している乗務員に対し、列車無線による「問い合わせ」がひんぱんに行われました。

この無線による列車指令からの「問い合わせ」を、多くの乗務員は「もっと速度を上げろという圧力」と受けとめました。

そして、「ふだんならこのような場合、時速四五Kmくらいになるとノッヂオフにするけど、今日は、六〇～六五Kmくらいまで速度を上げてしまつた」と多くの乗務員が述べています。

## 乗務員詰所での会話

また、ある乗務員詰所では、次のような乗務員どうしの会話もありました。

「目の前がまつ白で、何も見えないので、六五Kmも出すなんて、自殺行為だと思った」

「時速四五Kmならダンプと衝突しても死なないけど、六五Kmならほぼ死ぬか大ケガだな」

「平野君が死んだ時、自分で納得できない速度は出さない。少し位賃金を下げられても、死んでしまつたら元も子もない、と思つたけど、今日はダメだつた」

「女房や子供に対しても、お客に対しても無責任だつたな」

「でも、何もなかつたからいいじゃないか」「それだけでいいのかな」

「もし、ダンプと衝突するような事故があつたら、お客でも死んだら、六五Kmで走つたことがツミになるのかな」

「列車指令は、何キロで走れとは言わなかつたな」

「それは、そうだ。今の管理者はどんな下つ端でも責任だけはとらない知恵を働かせるからな」

「管理者だって、つまらない責任とらされて出

われわれは、以上の会話の中に、多くの現実と教訓が含まれていることを見なければなりません。  
①職制は上から下まで誰も責任をとらない、  
②それがわかついても、生命の危険を感じていても、圧力に負けて速度を上げてしまう、  
③なぜ、圧力がかかつてくるのか、  
④なぜ、不当な圧力に屈してしまうのか、

という現実の中で、われわれは、

「4・1体制」が労働者を殺す

われわれは、自らの「出世」のために、精神主義・神風主義を押しつける職制に対する闘い、

第二に、自らのセクト的利益のみを追求し、運転保安問題を利用し、あるいは放置し労働者に死を強制する労働組合に対する闘い、

第三に、何よりも「圧力」に屈しそうになる自分自身との闘い、

情勢はわれわれに、極めて厳しい闘いを要求しています。

かつて、われわれが、「死か牢獄か」をかけて運転保安確立を闘つた時と同じように、否、それ以上に、「4・1体制」下の状況が、労働者は闘わなければ生きられないことを示しているのです。